

孤立が予想される地域で、南海地震から身を守る地域ぐるみの学校安全体制整備に向けて

高知県高岡郡四万十町興津地域ぐるみ学校安全体制整備推進委員会

中心校 高知県高岡郡四万十町立興津小学校 校長 松岡 雅士

住 所 〒786-0045 高知県高岡郡四万十町興津 1 5 7 2 番地 0880-25-0021

モデル地域の規模及び地域環境

- 1 学級数 6 児童数 45 名 教職員数 10 名
- 2 地域環境 本校は県西部に位置する四万十町の南西部、三方を山に囲まれ、海に開けた気候温暖で風光明媚な興津地域にある。四万十川が流れる高南台地（標高約 250m）の中心部から約 1.8 km、その二分之一は大小 140 近いカーブが連続する急峻な坂道をおりつけた地域の中心部に学校は位置する（4 年前、念願の峠のトンネルが開通し、約 2 km 距離的に短縮された）。きれいな海水浴場全国 88 選に選ばれた小室の浜まで徒歩 10 分というすばらしい自然環境に恵まれた小学校である。校区全体では 1143 名（平成 17 年 5 月現在）の人口を有しながら、この県道 32 号線が他地域との唯一の交通路であるという県下でもまれな地理的状况にある。このような状況から将来予想される南海地震においては、地震・津波による大きな被害と一定期間の孤立が予想される。

取組のポイント

- 1 小学校では、『遊ぼうさい（防災）』という視点を大切に地震に対する恐怖心だけを植えつけるのではなく、いろいろな取り組みを楽しみながら経験する。
- 2 児童数、職員数を考えてあまり大きな背伸びをするような取り組みは避け、やってよかった、子どもたちと保護者・地域の意識が変わったねという防災学習をすすめる。
- 3 学年ごとに年間学習指導計画をたて、防災学習を実施する。ただ地震・津波について調べるのではなく、自分の「命」を守り、他人の命を守ることを考えながら防災学習をすすめる。
- 4 学習を深める中で、地域の人たちとのかかわりを大切にし、地域の人と一緒に地震・津波に強い興津地域をつくっていく。
- 5 子どもたちが防災について学んだこと、経験したこと、感じたことを積極的に情報発信する。
- 6 防災力を強化にむけ日々努力している地域の姿を知り、将来の地域防災のリーダーを育てる。
- 7 南海地震のとき町の中心地のある台地部をつなぐ道が寸断され、一定期間の地理的孤立が予想

される中で、3 地域の共同性を高め、地域全体の防災力を強化する取り組みを行う。

取組の概要

1 取組の趣旨やねらい

興津小学校とその校区の関係機関・団体が連携しながら、学校・地域における防災体制の推進や、児童・教職員・地域住民の防災に対する意識の啓発・高揚を図る。

2 取組の内容・計画・方法等

（1）先進地視察（高知市浦戸地区への親子防災視察 87 名が参加）

10 月 9 日（日）大型バス 2 台を借り切って、高知県下の自主防災組織の先進地である高知市浦戸地区への視察を実施。

大人は浦戸地域の地理的な様子を散策したあと、浦戸ふれあいセンターで高知市総務部防



災対策課の山本係長から、近い将来発生が予想されている『南海大地震』による地震と津波についてビデオ画像やシュミレーション画像を交えながら大変分かりやすく説明を受け、今後起こるであろう地震と津波の恐ろしさをしっかりと学んだ。

そして地震がおきたら『揺れたらすぐ逃げる』を一番大事にして、身近な所にできるだけ多くの避難場所を造ること、避難場所



については地域の人々が協力して、場所と避難道を考えることが大切であることを学んだ。そ

のためには住民の自主防災組織づくりをみ

んなの英知を集めておこなうこと。地域防災を考える場合には子どもを主役にすれば、組織作りがスムーズにすすむということを、浦戸の取り組みを通して学んだ。

参加した子どもたちは、浦戸小学校の少年野球の子どもたちと地域の方に案内してもらい、地域の避難場所、避難道をはじめとする防災施設のウォークラリーを行い、今後の勉強に役立つ貴重な体験をした。

この体験を、興津地域の防災の取り組みに、具体的にいかすことを参加者一同確認した。

(2) 地震避難訓練 負傷者救護

11月24日(木) 小学校全校児童を対象に、日本赤十字社高知県支部の柚村誠先生を講師に招き、地震に対する避難訓練



と救護法の勉強を行った。

100秒間の揺れ(南海地震で想定される揺れの時間)の後、整然とす

ばやく避難場所である忠霊塔へ避難する訓練を行った。

5分で避難場所にということで訓練を行ったが、全学年とも目標時間内に避難できた。ただ、現在のままの忠霊塔だと途中の通路が崩壊することが考えられ、早急な対応が望まれることも分かった。

その後、体育館で避難について先生から講評を受け

た後、地震のとき必要な持ち出しグッズ(最低必要なものは水・携帯ラジオ・ヘッドライトなどの



電灯類)を確認した。つづいてバンダナを包帯・三角巾代わりに使った怪我の処置法、最後に毛布と竹や物干し竿を使っての簡易担架作りの実習を行い、大変勉強とな

った。

この講習会は来年度、PTAや地域の方も参加する方向で実施してほしいとの要望が出ている。

また、来年度の小学校の運動会種目に簡易担架づくり・運び競争を取り入れることを検討していく予定である。

(3) 危険箇所点検をかねて 峠の清掃を11月に実施しました

11月20日(日)の午後を使って、小

学校児童・PTA、中学校生徒・PTA、地域の方々、総勢110名が参加して峠の一斉清掃を行った。



昨年までは、小学校、中学校、地域(地域研)の3者がそれぞれ時期をずらしておこなっていたものを、今年から合同で行う。

6つの班にわかれ、1班はJA興津支所から1キロ上、6班は興津坂トンネルからゴミ拾いをスタートした。

各班とも、保護者や地域のみなさんの協力をえて、1時間かけて一生懸命に空き缶、ビン、タバコの吸殻、ビニールなどを拾い集めた。拾い集めたゴミは軽トラ3台近くあった。ガードレールの下にはたくさんのゴミ、中には捨てられたバイクなどもあったが、子どもの安全上からも、道路脇に限定して拾った。もし拾っていたらすごい時間と量になっていたと思う。子どもの願いが地域や興津を訪れる人々にとどき、ゴミのない、みんなに誇れる自然の宝庫の興津になってほしいと願っている。

同時におこなった危険箇所点検では峠の多くの部分が大規模地震で崩落し、地域が孤立することが分かった。出来るだけ早期の改修が望まれる。

(4) 推進委員26名で 徳島県立防災センターの視察

12月4日(日)実行委員会のメンバー26名で徳島県北島町にある「徳島県立防災センター」への視察を実施し、防災学習、地震体験等を行った。学んだ体験を興津地域の取り組みに生かすことを参加

者全員で確認し、有意義な視察となった。また、来年度、小学校では5・6年生と希望する保護者で研修視察を実施したいと考えている。



(5) 2月5日 防災炊き出し訓練 400名の参加者で大成功！

興津地域は1100名以上の住民が生活しながら、町の中心部とつながる道路が県道一本しかないという全国的にもあまり類のない地理的状况を抱えている。震度8強の南海地震が来れば、かなり高い割合で県道が寸断され、一定期間の孤立が予想される。台地部から救援が来るまでの間、地域の住民の生命をつなぐ食事確保ため、地域住民が力を合わせた「炊き出し」をおこない、支給するかが重要となってくる。

そこで、2月5日 興津小学校運動場で推進委員会主催の「防災炊き出し訓練」がおこなわれた。1月18日に開かれた推進委員会において『400人規模で訓練を成功させよう』という目標のもと、各参加団体が工夫した取り組みをおこなうことを確認した。推進委員会のたくさんのメンバーが大釜、クド、食器類、食材等の調達、可能な限り多数の方への参加の呼びかけを行ってきた。

4日の準備にもPTA、推進委員、地域婦人を中心に20名近い方々が参加した。

5日当日は、大変天気にも恵まれ、最高の炊き出し日和となった。朝早くから地元消防団、婦人会、



老人クラブ、PTAをはじめ各団体から150名近い方が準備と炊き出し作業に参加した。
小学校5・6年生児童は自分たちの分

担する500人分の食事に対応できるようにするため簡易炊飯袋に短時間で手際よく袋詰めし、大釜でおいしいごはんを炊くことをめざして2週間前から試行錯誤を繰り返しながら、いろいろな工夫を行った。前日は3～6年生児童が上級生の指導のもと、40升(4斗)の米洗いなどを行った。炊き出し当日は400食分の炊飯袋詰めで大活躍をした。

非常時を想定して電気、ガスは全く使わずまきを

燃料に、昔ながらの大釜とクドによる500人分の炊飯袋による炊飯とトン汁もたくさんの方の協力をえ、予定した時間より30分早く、また、大変美味しく出来上がった。

この日小学校の運動場に集まった人数は、興津の人口の1/3を上回る400人だった(見事 目標の人数を達成した)。これだけたくさんの方が参加しての炊き出し



は、今後の非常時に備えての地域の大きな財産になった。来年、形をかえて炊き出しをやるという声もたくさん聞かれた。

興津地域は、津波を想定した避難訓練など「逃げる」ことを以前から取り組んできたが、今回の「災害からの復興」を想定した訓練を実施したことで、地域の防災力強化に向け、大きく一歩を踏み出した。

(6) 防災講演会

平成18年2月22日(水)午後7時より興津小学校体育館で実施。(当初1月25日に講演会を予定していたが高知大学岡村教授が急病のため延期)

講師は高知大学理学部の松岡裕美助教授で「南海地震に備えて」という演題で、地域住民、小学校高学年児童、中学生、教職員約100名を対象に講演をしていただいた。

(7) 防災マップづくり

11月末から5・6年生児童による『興津地区防災カラーマップ』づくりがスタートした。

近い将来、予想される地震・津波に備え、防災意識をたかめ、「より早く安全に避難場所に避難していただく」ことを目的に、子どもたちの足と目で調べながら、カラーの手づくりマップの完成をめざした



マップの原版は5・6年生が4つの班にわかれて、分かりやすいものになるよう試行錯誤を繰り返しながら作成した。防災マップ原版は2月上旬に印刷所に入稿した。マップの大きさをA2のカラー

版にしたのはカレンダーのように家の目に付く場所に掲示してもらい、いざというときに役立ててもらうためである。また、



長期の掲示のためやわらかい色となるように工夫を凝らした。マップ作成にあたっては地域の避難場所（町役場指定）へのフィールドワークをおこなった。

その中で子どもたちは、現在の避難場所の課題も認識してきた。ここに避難場所があったらいいねという願いをこめ、写真や文字の配置も工夫した。将来、新しい避難場所ができると学校でカラー印刷し、マップに張り込んでもらう予定である。

マップは3月10日総代・区長便で地域500戸に全戸配布した。多く人の集まる公共施設等からは複数枚数配布の依頼がきている。子どもの手作りのメリットを生かした末永い利用を委員会と学校では考えている。

（8）防災標語看板の設置

防災標語と看板作りを3～6年生児童で行った。看板は長期にわたって潮風にさらされてもかまわないように厚めのコンパネと米松を使用し、ペンキも3重に塗った。（費用面を考え、看板の元は職員が製作）



各学年が考えて選んだ防災標語とイラストで看板をつくり、3月中旬地域のメイン通りである学校前に10枚設置した。



（3・4年生4枚、5年生3枚、6年生3枚作成）

3 実践の成果

この半年間の取り組みの中で実際に学習をしていくと、目の前が海で、南海地震がおこれば確実に津波の被害に襲われる場所にたくさんの子供たちが生活しているという現実があり、取り組みを始めた当初、どうしても地震・津波は怖いという意識が出始めた。授業を受ける子どもたちの顔がこわばってきたよう

な気がしたという声が全学年の先生から聞こえてきた。しかし、『そのとき、どうしたら、いいの？』ということが分からないと、恐ろしさだけでは生きのびることはできないという事実にもとづき指導法を工夫してきた。

正しい知識を学び、体験を通して知識を豊かにするため、興津小学校では、先進地域の実践に学び、『遊ぼうさい（防災）』という言葉キーワードに実践を行った。地震に対する恐怖心だけを植えつけるのではなく、いろいろな取り組みを楽しみながら経験する、学習することで、『自分の命を守る』『他人の命を守る』『地域の結びつきを強める』『行政を動かす力』といったことを学んでいくことに主眼をおいて取り組んできた。

正しい知識の学びの位置づけ

- 正しい知識を知っていればいほど災害前後の備えができるから。そこから地震・津波に強い地域づくりが進んでいくこと。
- 地震や津波がきても慌てず、地域の人と協力して行動し、自分の命や他人の命を守り、助けることができること。
- 自分の命を守り、元気な状態で地域の人たち全員と協力し、復興に協力できること。
- 孤立が予想される地域で命をつなぐ炊き出しや避難・救護訓練をおこなう中で、その仕方を地域や専門家の人たちとかかわって体験的に学び、地震や津波がおきた時、みんなで協力することの大切さを実感すること。

各学年ともただ地震・津波について調べるのではなく、自分の「命」を守り、他人の命を守ることを考えながら防災学習をすすめた結果、子どもたちは地震・津波をより将来確実に起こる身近なものとしてとらえなおし、新たな視点で関心を持つようになってきた。学習を深める中で、地域の人たちとのかかわりがますます大切になってくることを児童も職員も学んでいった。その学びは、今後さらに地域の人と一緒に地震・津波に強い興津地域をつくっていくことにつながるのではないと思われる。

防災の学習は被災の事実も大事だが、「では、どうやってたくましく生きのび、地域を復興させていったのか」ということを盛り込んだ、楽しい学習への発展が大切になってくる。学習や体験活動をすすめる中で子どもたちの間から自然に出てきた「防災学習は楽しいね」これだけ興津の人が集まるとうれいね」という言葉。この言葉が本事業を取り組んだ小学校での最大の成果であり、今年度の課題を整理

しながらすすむ、次年度以降の取り組みの方向性をしめしたものであるといえる。

また興津地域全体でいうと、興津地域ぐるみ学校安全体制整備推進委員会に参集する団体は、子どもからの発信をしっかり受け止め、防災を地域全体の課題にするために全力をあげてくれた。とりわけ、この2月に実施した『防災炊き出し訓練』は、地震災害時地理的孤立が予想される興津地区で、災害に負けずしっかりと3つの地域が力を合わせ、復興に向けたくましく生きていく第一歩として、食を通じての共同性を高めることを目的に取り組んだ。推進委員会で役員会が提案した400名規模（興津地域の総人口の1/3以上）という参加目標は、当初無理ではないかという声も聞かれた。しかし、各団体の献身的な取り組みの中で、炊き出しに必要な道具も必要数以上そろい、前日の準備や当日の作業に参加した人数も児童を含め200人近くになった。そして、炊き出し当日は見事目標にしていた400人規模の訓練となり、地域の共同性の高まりと同時に興津地域の底力を肌で感じることができ、次年度以降の防災力を高める取り組み展望も生まれてきた。

実際の活動を振り返ると、一定の成果がうまれ、これから取り組まなければならない課題も次第に明確になり、今後の地域防災の取り組みの方向が見えてきた半年間であった。

その中で、最大の収穫は「楽しく学習できたこと」「地域の共同性が高まったこと」である。また、地域防災の取り組みは、地域の未来を担う子どもたちの学習と体験活動を核にしながら、さまざまな工夫をしながら継続をしていきたい。

4 課題等

学校で考える課題

年間指導計画の見直し・・・遊ぼうさい+サバイバル精神をもって

しっかりした学びを中心にすすめる（学習内容の系統化）

地域との連携の強化

地域の方から昭和の南海地震の聞き取り、当時の様子の話を聞きまとめる。（地震・津波の様子と興津各地域の被害の様子を聞くと同時に地震後、人々はどうかましく生きていったかをしっかりと学ぶ）

町内在住の阪神大震災被災者の話を聞き、どうみんなが力を合わせて生きていったかを学ぶ

5・6年生による親子防災視察（徳島県立防災センターで総合的な防災学習と体験をおこなう）

徳島への移動は興津中学校のバスを利用する予定

大学や専門機関の協力のもとで、継続的にフィールドワークをおこない、今年度作成した全戸配布手づくり防災避難マップの中身をさらに充実させる・・・新しい避難場所をシールでマップに貼りこんでいく

地震・津波に強い地域づくりアンケートを工夫しておこない、児童防災提言をまとめる

P T A・地域とともにおこなう救急法講習会の実施

秋の大運動会に簡易担架作り競争、木こり競争を親子・地域競技で入れる

ロープ結び教室を開く（漁師さんの知恵を子どもたちに）

夏休み4・5・6年生による学校での防災キャンプ・・・できれば夜間避難訓練も

地域全体で考える課題

避難場所の整備。大規模ではなく短時間で避難できる小さな避難場所を数多く設置

地域の共同性を高めることに主眼をおいた「地域防災力」の強化に向け、継続的な取り組みをすすめるための創意工夫

炊き出し訓練の継続（地理的孤立が予想されるため、食料等の備蓄庫の整備も含めて）

地域全体が主体的に防災のあり方を考えることを目的としたシンポジウムの開催（大学の先生、行政の代表、保小中の保護者代表、地域の住民代表、児童生徒の代表による）炊き出し訓練と同じ日に実施

海にきわめて近く地震発生時架橋が落ち、避難が困難な保育所とデイサービスセンター校員の移転策の具体化

建築後40年が経過する小学校校舎の立替え（保育所との複合施設も視野に入れて）

津波避難訓練への多くの住民の参加（小中学校の児童生徒の参加も含め）

夜間避難訓練の実施（高齢者の割合が高い現状をふまえ、避難場所・避難道・避難用街灯の整備も視野に入れて）